

研究室紹介

愛知県農業総合試験場 山間農業研究所 園芸研究室

1 組織の概要と立地

愛知県農業総合試験場山間農業研究所は愛知県東部の山間部に位置し、岐阜・長野両県に接する豊田市稲武町に立地する。1933（昭和8）年に、愛知県立農事試験場稲橋試験地として設立されてから現在に至るまで約90年間にわたり、組織改編、名称変更を行いつつ、1994（平成6）年度に稲作研究室と園芸研究室で構成される現在の研究所となった。山間農業研究所では、中山間地域における農業技術の拠点として地域の要望に応えるため、冷涼な気象条件を活かした水稲優良品種の育成試験や中山間地域の特産野菜・花きについて、省力化・品質向上のための栽培試験および品種育成を行っている。

2 野菜に関する試験研究

・ジネンジョの全量基肥栽培の確立

ジネンジョは、5月に定植し、11月から12月にかけて収穫するため長期間にわたり肥料成分を供給し続ける必要がある。施肥基準では、定植後に基肥を施用し、3回の追肥と合わせて計4回の施肥を行うことになっている。このため、省力的で低コストなジネンジョ専用肥料と施用技術の確立が求められている。

ジネンジョの全量基肥栽培の確立に向け、愛知県経済農業協同組合連合会と共同開発し、所内および標高の異なる県内3圃場で慣行肥料との比較試験を行った。その結果、開発肥料は慣行肥料と同等の生育・収量が得られた。また、価格も3割程度慣行肥料より安価となった。2021年に県内産地に適応する安価な肥料（商品名：自然薯ワンタッチ）の開発ができ、現在、本県ジネンジョ産地に普及している。

・エゴマの品種開発

愛知県の中山間地域ではエゴマが栽培されており、特産品である五平餅のタレや、エゴマ油などに加工・販売され、地域振興に寄与している。

当研究室では、本県で栽培されているエゴマの在来種‘名倉’より収穫時期が早く、早霜の被害を回避できるほか収穫作業時期の分散が可能で、‘名倉’よりも草丈が低く、茎が細いため、収穫が容易なエゴマの新品種‘No.7’を開発し、2024年1月30日付けで品種登録出願を行っ



図 エゴマの新品種‘No.7’の植物体と子実

た。本県エゴマ産地の主力品種の一つとして普及することが期待される。

3 花きに関する試験研究

・あいち農業イノベーションプロジェクトについて

愛知県では2021年度から、農業総合試験場や大学が有する技術、フィールド、ノウハウとスタートアップの新しいアイデアや技術を活用した共同研究体制の強化を図り、新しい農業イノベーション創出を目指す「あいち農業イノベーションプロジェクト」を実施している。

中山間地域では厳寒期に施設園芸品目の育苗が行われ、光熱費の高騰が経営を圧迫している。本プロジェクトにより当研究室では「中山間地における保温システムの構築」を研究目標として、厳寒期のシクラメン栽培等にかかる光熱費を削減するため、民間企業と共同で熱効率の良い発熱体を用いた保温システムを構築している。

4 その他

このほかにも、夏秋トマト、小ギクの栽培技術の開発など中山間地域の生産現場で役立つ成果を提供できるよう技術開発に取り組んでいる。

（園芸研究室長 久野哲志）